

第一期 第七十九号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2023. 02. 20 定有堂書店 発行

沫雪に寄せて

奈良 敏行

国語入試の歴史的名(迷)問に挑戦してみよう

岩田 直樹

汽水のほとりから (23)

小原 修治

くらしし任侠伝

萩原 俊郎

『他者と生きろ』

松田 裕史

ある男(A MAN)

芝野 浩貴

失われた本屋さんを求めて (続)

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その七十八

内田 克彦

八代日記 (三十五)

齊藤 仁昭

四姉弟

秦阜 梅林

多分、元気になります

三浦 永理

ストック

あきの素生

野母事件 ミス・マーブルからの贈り物(二) ドラメラア

…… 編集後記



## 沫雪に寄せて

奈良 敏行

(定有堂 店主)

「新年にこんな「うた」を教わった。

《淡雪の中に頭(た)ちたる三千大千世界(みちおほち)またその中に沫雪ぞ降る》

この「うた」の正確な鑑賞はできないが、入れ子構造に外界を見ている点に興味を持った。淡雪の降る「日常」世界、そして沫雪の降る「本屋」空間、という風について連想してしまった。「本屋」はそのように異空間なのだろうか？ 入れ子構造に世界を感じる人が「うた」を詠めば、そのように見ていると知れる。入れ子構造に世界を見ている人が、「本屋」をそのようなものと思えば、「本屋」はそのようなものとなる。

本屋を始めるとき、あるイメージがあった。広大な砂漠に一夜にして都市が生まれ、その後また一夜にして砂塵にかえる。これが自分の沫雪だった。乱読していた頃なので、なにかの本の中の記憶だったのだろうかと思うが定かでない。

い。稲垣足穂の『一千一秒物語』の「黄漠奇聞」かなども思うが、あれは悪いことをして罰された話なので、少し違う。違うけど茫漠としたところは似ている。

ふとある小説の中の人物の一言がここに蘇って来た。「人はどこかに行かなければならないんだ、どこかに」という執拗な声だった。ドストエフスキーの作中人物マルメラードフのセリフだ。学生の頃クラスのある男が一週間以上姿を見せなかったことがある。「どうも下宿でドストエフスキーを読み浸っているらしい」という噂が流れた。これも「沫雪」だと思う。生き急ぐ実存の時間の流れと空間のゆがみがここにある。

どこにも行き所を見いだせず本屋を仕事とする。本の世界と日常の世界はつながっているのだろうか。品揃えは日常の世界を反映しようとして日々努力している。「淡雪」と「沫雪」というイメーজの重なりを知ったとき、ふとそうではないのかも知れないと思いはじめた。

『音信不通』13号に「閉じる物語」というタイトルで記したことがある。「相国寺に伝わる宗達様式の六曲一双に「蕪の細道図屏風」というのがある」という書き出しで、「趣向のありどころは、この平面が、左右でつながる風景だ、と気づくところにある」と説明する。道中図で人が歩いている。平面がエンドレスにつながるのでも「沫雪」

の世界。閉じた空間が好きなのだ。

本屋は閉じた空間だと思う。「淡雪」とつながっていると思えばもうとするが、やはり少し違うのだと思う。

本屋を始める前の「淡雪」の日常は乱読の時代だった。「どこかに行かなければならない」、もっと遠くへという思いだった。購読会で「ルソー研究」をやっていた関係で、ルソーの『言語起源論』にも興味を持ち始めた。「自然へ」というのがルソーの魂だった。そこを踏まえたスタロバンスキーの『ルソー透明と障害』という本は秀抜だった。地中海から貝殻に覆われた醜い塊が引き上げられる。貝殻を落とすと美しい彫像だった、という話だったと思う。大事なものには内側にあるのだ。そうこうしているとルソー批判でもある、デリダの『根源の彼方に』という書物に出会った。大事なものは内側にはなく表層にあるという話だった。ぐるりと一回りしたところで本屋を始めたので、その議論はもう必要のないものだった。それから四十二年が過ぎた。棚構成としての「暮らし」とそこには定形はいらないのだということを手張している内に、ふと思いついて「ドゥルーズを読む会」とそれに対応してドゥルーズ・コーナーができた。ドゥルーズ論は五十冊ほど目を通した。デリダも再び手にしたがやはり理解できない。でももう「遠くへ行きつづける」必要もないと思った。

「どこかへ行かなければ…」と歩みつづけるのだが、結局「蔦の細道図屏風」の世界だった。「淡雪」の日常を踏みしめること少なく、「沫雪」の世界に遊びつづけた四十二年だった。本屋が必ずしも「沫雪」の世界だというわけではないが、少なくともわたしにおいては、「どこかに行かなければ…」という焦燥につり合った、日常とはひとつ違った「沫雪」であった。

2023. 01. 09

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

稲垣足穂『一千一秒物語 改版』新潮文庫 2004

ドストエフスキー『罪と罰 上中下』岩波文庫 1999

ルソー『言語起源論』現代思潮新社 2007

ジャン・スタロバンスキー『ルソー透明と障害』みず書房 1993

デリダ『根源の彼方に 上下』現代思潮新社 1972

太極拳教室(会場 定有堂二階) 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

## 国語入試の歴史的な(迷)問に挑戦してみよう

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授)

「読む会」選書人

教育業界は受験シーズン真っ只中である。

この時期、毎年のように思い出すのが、一九九九年まで二〇〇字の作文が出題されていた東大国語入試である。(詳しくは、竹内康浩『東大入試 至高の国語「第二問」』朝日選書二〇〇八年、参照。)

金子みすゞ(一九〇三—三〇)再評価の一助となったともいわれる一九八五年第二問は受験業界では有名だ(「」は改行―引用者)。

次の二つの詩は同じ作者の作品である。二つの詩に共通している作者の見方・感じ方について、各自の感想を一六〇字以上二〇〇字以内で記せ。

「積もった雪」

上の雪／さむかるな。／つめたい月がさしていて。

下の雪／重かるな。／何百人ものせていて。

中の雪／さみしかるな。／空も地面(じべた)もみえな  
いで。

「大漁」

朝焼け小焼けだ／大漁だ／大羽鯛の大漁だ

浜は祭りの／ようだけど／海のなかでは／何万の／鯛のとむらい／するだろう。

金子みすゞの死生観が現れているようだが、何と解答すればよいのか適切な言葉が見つからない。「出題の意図」に沿って出題者のみが採点するのであればともかく、何十人もの(百人超?)の採点者が約一万人の答案をいかなる統一基準で採点したのか想像を絶する。(実験的な第二問が廃止されたのは、採点の難しさに起因するのではないか。)

もっと有名なのは一九九二年第二問。当時、週刊誌に取り上げられ大きな反響があった。

次のア・イ・ウは、同じ主人公が登場するシリーズものの映画のセリフである。ア・イ・ウのいずれかを選び、それを手掛かりとして、感じたこと、考えたことを一六〇字以上二〇〇字以内で記せ。

ア「インテリというのは自分で考えすぎますからね、そのうち俺は何を考えていただろうって、分かんなくなってくるんです。つまり、このテレビの裏っ方でいいます

と、配線がガチャガチャにこみ入っているわけなんですよね、ええ、その点私なんか線が一本だけですから、まあ、いつてみれば空っぽといましようか、叩けばコーンと澄んだ音がしますよ、なぐつてみましようか」

イ「寅さん、人はなぜ死ぬのでしょうねえ」「人間？そうねえ、まあ、なんて言うかな、結局あれじゃないですかね、人間がいつまでも生きていると、陸の上がね、人間ばかりになっちゃう、うじやうじやうじやうじやうじやうじやうじやう、みんなでもって、こうやって満員になって押しくらマンジュウしているうちに、足の置く場がなくなっちゃって、隅っこに居るやつが、アアなんて海の中へ、パチャンと落っこって、アップ、アップして『助けてくれ！助けてくれ！』なんてね死んじやう。そういうことになってるんじゃないですか、昔から。そういうことは深く考えないほうがいいですよ」

ウ「梅の花が咲いております。どこからもなく聞こえてくる谷川のせせらぎの音も、何か春近きを思わせる今日この頃でございます。旅から旅へのしがない渡世の私共が、粋がつてオーバーも着ずに歩いておりますが、本当のところ、あの春を待ちわびて鳴く小鳥のように、暖かい陽ざしのさす季節に、恋焦がれているのでございます。」

アウの出典は、それぞれ「男はつらいよ フーテンの寅」(第三作、一九七〇年)、「男はつらいよ 寅次郎純情詩集」第一八作、一九七六年)、「新・男はつらいよ」第四作、一九七〇年)。私は「寅さん」シリーズ全四八作(渥美清の死後に再編集された二作を含めると全五〇作)をテレビで観たことがあるが、出題者は各作品を封切時に映画館で観た世代なのだろう。

私がまだ若かった九二年当時、アとウのセリフには全く感銘を受けなかった。イは「粋なことを言うじゃないか。さすが寅さん！」と、自分なりの解答を考えたものだ。しかし、格差社会がますます拡大している今日的な観点でこのセリフに接すると、「上級国民」が「下級国民」||「隅っこに居るやつ」を追い落とす構図は実にけしからん、と憤りを覚えてしまう。(もちろん寅さんはそんなことを言っているのではない。)

今だったら、即座にウを選ぶ。「しがない渡世の私共」は単数形の「私」ではない。「私共」||「私とあなたたち」は、ともに「旅から旅へ」と渡り歩いているのですよ、「暖かい陽ざし」||「幸せ」を求めて。寅さんはそう言っているような気がしてならないのである。

# 汽水のほとりから (23)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

渡辺京二が亡くなった。享年92歳。作家としても現役のまま、天寿を全うされた。一昨年から週一回のペースで続けられた熊本日日新聞の連載「小さきものの近代」は、現在第一巻のみが出版されているが、その緒言によれば、これは明治維新の長い物語を記すもので、大逆事件あたりで筆を擱くつもりだったようだが、そこまで生きられるか怪しいものだとも書いている。覚悟の船出とはいえ、実際こうして作品は未完に終わったわけだが、奈良さんに先日伺ったところでは、書き溜めた原稿がまだ大量にあるそうである。作家の執念や畏るべし。御冥福をお祈りしたい。

一般に、歴史とは人名の羅列である。が、渡辺京二は、そうした歴史のあり方に異を唱え続けた人であった。前掲の遺作のタイトル中にみえる「小さきもの」とは、作者の説明によれば、「上から日本近代国家を創った人物たちではなく、その創られた「近代」に適応してゆかざるをえな

い者たちのこと」で、いわば歴史に翻弄されて生きた無名の民衆の意である。和辻哲郎文化賞を受賞して代表作とされる『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）も、異国の眼に映る幕末明治の民衆の姿を描いたものだった。

「小さきもの」といえば、渡辺京二には若い頃に書いた「小さきものの死」という小品がある。当時話題になった『日本残酷物語』に言及しながら、彼はこう述べている。「人間の社会は歴史と共に進歩し、残酷物語は人智と共に確実に減少するであろう。しかし、世界史の展開がこれら小さきもののささやかな幸福と安楽の犠牲の上に築かれるという事情もまた確実に続き行くだろう。世界史の達成をもつて小さきものの死の各々をあがなうことはもとより不可能である」（『民衆という幻像』ちくま学芸文庫）。彼はこうした認識を手につつ、自身もまた一民衆として「近代」に如何に抵抗し、自立するかを考えた人であった。

その意味で、彼が生涯一貫して興味を抱き続けたのは、コミュニケーション主義というべき思想であったと思う。『北一輝』（ちくま学芸文庫）という作品もあるが、二・二六事件で処刑されたこの思想家への興味も、彼が西郷隆盛を発端とする日本コミュニケーション主義の系譜に連なる人物であることがその理由である。北一輝はマルクスの思想を吸収したが、共産主義（コミュニズム）も文字どおりコミュニケーションの思

想であり、コミュニケーション主義は右翼・左翼といった区別に収まりきれぬものではない。学生時代に共産党へ入党した経験を持つ（後に離党）渡辺氏が、成長して右翼思想家に魅了されたとしても、一貫していると言える所以である。

とはいえ、彼はコミュニケーションを求めるのに、右翼・左翼のように、国家を足場としなかった。では、何を足場としたか。地方だ。彼はこう語っている。「そんなこと（\*雑誌を作ること―引用者注）をしながら、僕は熊本にいたのだけど、何も熊本への愛郷心とかじゃない、熊本は僕の世界を生きる場所だから。熊本に生きているというのは、地方文化に生きているんじゃない、コンテンツポラリーなんだと思うんです。だから、そこではコンテンツポラリーな課題に対応できる学問と芸術をしっかりと残したい。東京ばかりに任せてたらダメですよ。熊本に特に取り柄があるわけじゃない、僕は熊本にたまたまいるから、熊本なんで、自分のいる場所で、学問と芸術の場をつくっていかないと」（「二元論のはざままで生きる」弦書房『幻のえにし』所収）。

東京で私大を卒業後、日本読書新聞に就職して編集者となったが、すぐに辞めて帰郷し、喰うために『熊本風土記』を創刊した彼は、地元の無名ライターの発掘にも努めた。その一人が当時水俣市の一主婦だった石牟礼道子である。『熊本風土記』に連載された彼女の「海と空のあいだに」

という作品は、『苦海浄土―わが水俣病』（講談社文庫）7として世に出、後に評判となった。そのことをきっかけに彼は石牟礼らと「告発する会」を起ち上げ、水俣病訴訟を共に闘うことになる。水俣病患者の死が「小さきもの死」であつてみれば、それは当然の道行きだったに相違ない。

先日テレビで彼の追悼番組をやっていた。最後に流れた発言集からの朗読が感動的だったので引用したい。思うにこれは彼がコミュニケーションに託した夢である。「つまり自分は一人である、自分は自分の考えで生きている、国からも支配されない、いわゆる世論からも妄想からも支配されないというあり方ができるのは、自分がある土地に仲間とともに結びついていると感じるからなんだ。（中略）自分がこの世の中で自分でありたい、妄想に支配されたくないという同じ思いの仲間がいる。それが小さな国である。自分が自分でありたいという自分と、同じく自分が自分でありたい人たちが作った仲間が、小さな国になっていく。そういうものをつくり作るといふことが僕の思う革命なのさ」（弦書房『幻のえにし』所収「二万字インタビュー」より）。

# くらよし任侠伝

定有堂倉吉支店その③⑧

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

人生の半分を倉吉で暮らして、ここはかなりアバウトな町なのではないか、とよく感じる。地方の古い町にはありがちなだろうが。鷹揚とも、懐の深さとも違う。

〇を初めて目にしたのは倉吉に転動して間もない、「メーデー」の会場を取材している時だった。

「労働者諸君、ご苦勞様でアル」。大音響の方角を見ると、一台の右翼の街宣カー。つるつるのスキンヘッドに濃いあご髭、カーキの戦闘服姿の男がマイクを握っている。会場からは一斉に「帰れ！ 帰れ！」の声。すると男は「では、私は退散するでしょう。年に一度の労働者の祭典、頑張り給え」。そう言うと、あっさり引き揚げた。

「なんですか、あれ」と他紙の記者に聞くと、「ああ、あれな、自称・右翼の〇だ」。マイクを握って一人で街宣

カーを走らせているのだという。

やがて、〇は市内の企業や病院にスキャンダルめいたことを嗅ぎつけると玄關前に乗り付けて大音量でアジ演説し、相手が耐えかねて「ひとつ、これで…」とお引き取り願うまで居座る、という右翼思想とは無縁、政治結社とは名ばかりの生業でしのいでいることが分かってきた。

◇ ◇ ◇

そんなある日、地元警察から「市内の喫茶店でゲーム賭博の27人検挙」という発表があり、最後の方に〇の名前があった。「おっ、〇が捕まっとるぞ」。祭り好きのデスクがはしゃぐ。翌日の新聞には「右翼の〇ら検挙」の大見出しが躍ったが、一抹の不吉な予感がよぎった。

次の日、支社のドアがバーンと開いて、〇がどなり込んできた。「ワシは一番微罪なのに、なんで一番大きく書かれているんや、こら。責任者、出せ！」。確かに〇は微罪なので、警察は聴取後すぐに放免しようだった。

「何とかしろ」とデスク。「えーっ、僕がですか」。ドアは一カ所で逃げ場はない。とっさに一計を案じた。

「〇さん、申し訳ありません。検挙者の中ではあなたが一番有名なので、新聞ではああなるんですよ」

〇はあご髭をしごきながら、「そうかあ、そんなものかあ」と目を細めた。「まあ、『有名税』みたいなもので」

と言うと、「じゃあないのお、そういうことなら」。最後は満面に笑みを浮かべて出ていった。

◇ ◇ ◇  
地元をよく知る印刷会社の会長さんはOとは近所の幼なじみで、彼のことを「ススムちゃん」と呼ぶ。「Oの父親は信用金庫の創設者の一人で、世が世ならば坊ちゃん。父親が早く亡くなり、大阪へ働きに出てから良からぬ道に染まったが、根はいいモンだ」という。

あの件以来、Oとは妙に親しくなった。当時住んでいたアパートの前で子どもをあやしていると目の前に黒塗りのアメ車が停まり、「ほう、ここがあんたのアパートか。お、かわいい子やなあ」。ああ、Oが凶悪なヤクザや右翼なら、私と家族はもう完全にアウトになるところだ。

ある時、車で信号待ちしていると横に停まった車から顔がひゅつと出てきて（向こうは左ハンドルなので）、「ワシ、しばらく倉吉からおらんようになるけ、よろしく」と挨拶された。警察に何週間か収監されるらしかった。

◇ ◇ ◇  
Oが市議選に出馬したのには驚いたが、堂々中位で当選したのにはもっと驚いた。彼はなかなか人気者だったのである。しかし、後にもっと驚くことが起きた。

「倉吉市議を覚せい剤密売で逮捕」。私が大阪に勤務し

ていた頃、全国ニュースが流れた。現職市議が覚せい剤9-  
を売るなど前代未聞。これでOの命運も尽きたか。

ところが数年して大阪から帰り、妙な噂を聞いた。Oが毎晩、拍子木を持って「火の用心」の夜回りをしているという。「今度こそ反省しているらしい」という住民の評判も聞いた。やがてOは市議に再出馬、信じられないことに再当選し、最後はなんと副議長まで務めた。

Oは9年前、ガンで亡くなった。たぶん、こんな町は全国でもない。「火の用心」の夜回りぐらいで罪が許され、副議長までなれるのか。住民は何を考えているのだ。一方で、この町のアバウトさ、いい加減さが、Oを何度も悪の道から引き戻した、ともいえる。

実は倉吉には、暴力団抗争で女装して組長を襲った「伝説のヒットマン」もいる。刑期を終えた今は町に溶け込み、真つ当に暮らしているという。詳しくは書けないが、けっこう人気者らしい。組はもうなくなった。

そのアバウトさから新校名問題の迷走など何かとお騒がせの最近の倉吉だが、このような「任侠伝」の残る妙ちきりんな町もあっていいのでは、とも思う。

# 『他者と生きる』

松田 裕史

(高校教員)

医療人類学という学問分野があることは知らなかった。

磯野真穂はそこで得た知見を活かして他者論を展開し、「人間」「生」「死」「人生」を新たに定義しようとする。教育の視点から磯野の言説を読み直すところとなるだろうか。特に、本書（『他者と生きる』）の後半で紹介される三つの人間観（統計学的人間観、個人主義的人間観、関係論的人間観）は傾聴に値する。

統計学的人間観とは平均人の概念を根底で支える人間観であり、平均人とは統計学的に導かれた人間像。個人主義的人間観は、「二つの身体の中に一つの個人が宿っており、それは世界からも分離可能であるという人についての理解」のこと。統計学的人間観と個人主義的人間観は相反するもののように見えるが、磯野はその二つは強固に手を携えていることを示す。「統計学的人間観が主に疫学の文脈で私たちに提示される時、むしろそれは抗いがたい強烈な倫理を放つ。その倫理とは、生物的な命が存続することが何よ

りも素晴らしいという呼び声であり、この倫理が立ち上がる理由は、疫学の素地である統計学的人間観が、個人のかげがえのなさに絶対的な価値を置く個人主義的人間観に基づき立ち上がっていることにある。」

教育現場でも統計学的人間観、個人主義的人間観、関係論的人間観は未整理のまま入り乱れている。例えば、志望校合格可能性はその生徒の過去の模試データ、過去に同じ大学を受験した生徒の可否と成績との相関関係などから導き出される。共通テストの予想点すら受験前に生徒は知らされる。ABCDEの判定は生徒にとってはこちらが思う以上に強烈らしく、そのまま鵜呑みにする生徒や保護者もいる。（生徒個人のデータにならない背景、特性などはこちらん捨象された上での予想であるのでAとEの判定は教員がすべき。）共通テストが終わると三日後には各業者から受験に関する膨大なデータも送られてくる。全てに目を通す時間はなく、その必要もないと思っている。データの切り取られ方の意図がよく分からないものが多数あり、語弊を恐れずに言えばデータのためのデータがほとんどのような気もする。個人主義的人間観と言えば、かつて芝野先生は黒板に「傍若無人」と書かれた。バブル期の若人たちはいつの間にか他者を省みることがなくなっていた。その後、失われた三〇年が平成から令和にかけて続く。

様々な選択の場面が義務教育段階でも高校でも設定されている。高校における進学や就職などの大きな選択の場面で次のような前提を措定してみる。「個性ある自立した個人がありのままに進学先、就職先を何らためらいなく選び、その場所であらかじめほしいと思っていたものを手に入れる、例えば資格など。偏差値や卒業生の就職率も参照にする。」このように無意識のうちに考えている指導者がどの程度いるか分からないが、これは統計学的人間観と個人主義的人間観に基づいた考えに他ならない。磯野はこれとは対峙する選択のありようを示している。「私たちが選択において選ぶことができるのは、選択において変わってしまうであろう自分を発見し、その変容した自分がその後起こる出来事に対応してゆくことを許容することである。」この選択の視座が関係論的人間観に基づくものである。他者との言動のやり取りは選択の連続である。その選択の結果、相手との関係性がどうなるのかいつも見通せるものではない。「関係論的人間観において、関係を持つ自己と他者はあらかじめ確定していない。投射によって互いが互いを生成し合い、それを見出すことで『私』／『あなた』という存在が初めて生まれ出る。」この生成の瞬間こそ時間に深みをもたらす。時間の長さ、人生の長さではなく「深さ」の手触りを感じることができぬ。

浅薄な個人主義と市場原理主義が幅を利かせている教育現場では関係論的人間観の肩身が狭いが、統計学的人間観、個人主義的人間観だけでなく、関係論的人間観も忘れないようにしたいものだ。優れた教育実践は関係論的人間観をないがしろにしない。

教育が関係論的人間観を深めることができるかという問があるとすれば、その他の分野についてはどうだろう。科学技術が、経済が、法が関係論的人間観とつながりうるか。数学はどうか。SNSはどうか。「はどうか。ドミニクチェンのタイプトレースは物語が語られるプロセス自体がスクリーンで可視化され、視る者が巻き込まれるようになっていくが、人と人のつながりを生むためのテクノロジーを使つた優れた例のように思える。あるいは、大学で肩身の狭くなったリベラルアーツが蘇生する可能性はもしかしたらここにあるかもしれない。『リベラルアーツと外国語』において、小倉紀蔵（京都大学）は「あいだのいのち」を定義する。「私とあなたの（あいだ）、私と何らかのものの（あいだ）、さまざまなもの・こと・ひととの（あいだ）」のちを見つけ、育むことが尊厳であると考えます。「古き良き教養ではなく、嘘っぽいエビデンスやブルシットジョブでもなく、新しい時代のリベラルアーツからも学んでみたい。

## ある男(A MAN)〜マイナンバープレートの行方〜

芝野 浩貴 (地球探査家)

いったいどれくらいの問題を君たちは解いてきたのか？

どれくらいの問題と格闘すれば受験生とみなされるのか？

幾度となく、ボブ・デュランの「風に吹かれて」の曲にのせて歌ってきた。ひとつには、受験まであらゆる問題を解き抜いてきたじゃないか、自信持って臨もう！という受験前の切実な応援歌として。ひとつには、答えのない問題に向かつてこそ意味がある人生、まだまだこれからという進学後の人生賛歌として。～before you call him a man～のA MANの歌詞が重たい。特別な人でなく、ある人、でもなく、人類代表のような意味だが抽象化されたものでもなく：アイスマンにしても、ルーシーにしても、人類史に影響を与えることがわかってからの命名だが。

ある男は、長崎街道を歩いていった。と言っても出島からでなく、博多駅から小倉の常盤橋までの国道3号線と重なった部分で、シユガーロードというにも短すぎる距離だった。車でウロウロしていた時には、何度か検問にあった場所だが、歩いている時は声をかけられることはあまりない。関門海峡

も歩いて渡ったり、門司港から唐戸まで船で移動したり、移動する方法もその場凌ぎだが、9号線と2号線の重複区間を歩く間に、その時は山陰道の方を歩くことに決めていた。これまたこのあたりも車でウロウロしていると、何度か検問にあった場所であった。県外ナンバーの私はよく検問の標的となる。山の中で熊に会わないようにするには、出会い頭を避けるために音を鳴らすこと。同様に見通しの悪い山道では道交法の規定に従ってクラクションを鳴らすことはあるが、街中で鳴らすことはない。道路を横断する時は、車の中の人に会釈をして渡り、車を運転する時は、前後の車に道を譲る。基本的には急いでいるわけではないので、周りより時を速めることはない。しかし、検問の時は不快である。一方的に時を止められて、身元を根掘り葉掘り聞かれて、車内荷物チェックされた後に、礼も言わずに、職務だから当たり前、の態度で去っていくようにする。その時には、私は言葉のクラクションを鳴らす。「世の中、家がある人ばかりではないですからね、県を跨ぎながら教え歩く人も存在しますからね、たまには本も読んでくださいね！」と。

川棚温泉から長門湯本までのヒッチハイクに成功したおかげで瓦そばを堪能することができた。益田まで来れば歩く筋は9号線がメインとなるが、舗道なき橋やトンネルとの闘いが続く。

その道すがらに、「ナンバープレート事件」の現場はあった。中国地方を車で周遊して、あるスーパールの駐車場に車を停めて、昼食をすませて次なる地に移動しようと車を停めていた場所へ戻った時のことである。おばあさんと警官が私の車の側に立っていた。厳密にいうと、私はそれが自分の車だと認知していなかった。何故ならば、ナンバープレートが取れていたからだ。

警官の話によると、おばあさんがバックで車を駐車する時に、あの薄いナンバープレートの部分だけ接触して壊してしまつたらしい。私は話の中身よりも、精神的に動揺しているおばあさんのことが気になり「怪しいものでもないし、ゆすつたり、脅したりしませんから、安心してください」の言葉を何度も繰り返した。

「逃げずに責任を果たそう」と私を待ち続けられたことに感動しながらも、年齢を伺うと80代だと言われた。「50代の時に体調崩して早期退職したこと」「夫さんは癌で抗がん剤を昼と夜に飲ませる隙間に買い物に来ること」

「息子さんは早期退職して起業されたこと」「義理の娘さんは公務員だったが、若くして亡くなったこと」

などご自身のことや家族の悩みを一気に話してくださいました。

私は被害者というよりも、もし加害者の立場で被害者が理不尽なことを言い出したらどうするのだろうかと想像しながらおばあさんが落ち着くのを待った。加害者としてナンバープレートを検索されているわけではないが、「マイナ・マイナー」とうるさい一億総背番号制度のこの国では、ある男、などすぐに抹消されるだろうと感じながら。映画・小説「ある男」におけるマグリットの「複製禁止」の絵の意味は深い。

荘子は妻が亡くなった時、涙を流すどころか歌を歌って楽しんで。「死の楽しみ」の近きを感じるために。「その場として引き受ける」には、ただその場にいることでなく、受動性の引き受けが必要だと荘子は説く。マイナンバーカード、インヴェイス制度など無縁の世界のことだ。(図書館の自由に対する冒瀆でもある)

他者の傷の物語を生きる

生まれた立場で命の軽重は変わらない

命に付く名前を心と呼ぶ

名もなき人へ

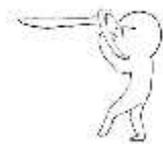
追悼 渡辺京二様(2022.12.25逝去)

「われわれは地球に一時滞在を許された旅人である」(文春新書・無名の人生より)

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示





太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・ 土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

## 失われた本屋さんを求めて (続)

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

市役所の旧庁舎がなくなり、第二庁舎(旧明治生命ビル)も取り壊された。かくして、県庁前から片原交叉点までが素通しになり、ずいぶん見晴らしが良くなった。電柱もないから空が広い。

かつて、県民文化会館の斜め前に大観堂書店があった。いささか雑然とした店だったが、取次が異なっていたためか、他店にはない本があつて、時々覗いた。

片原通りを大工町方向に進むと、喫茶店モーツアルトの斜向かいに朋文堂書店があつた。智頭街道にある書店の兄弟ということだった。木製のガラス戸を引いて入る、昔ながらの小さな店舗だったが、後に、駅前今の町交差点付近に移転。しかし、主人が亡くなって閉店した。

若桜街道を駅方向に進むと、今も横山書店がある。創業

元禄年間というから、市内で最も古い本屋である。ここは旧店舗時代から通っていた。先代の女主人が着物姿で座っていたのを思い出す。

通り一本隔てて、ロゴス文化会館の書籍部があつた。今もある三階建ての白いビルになってからのことしか知らないが、こちらも戦前から続く老舗であつた。新店舗は、ビルの一階であつたが、後に他業種のテナントが入り、書籍部は階段下の狭いスペースだけになってしまった。官報公示所だったので、扱う本も半分以上が政府刊行物。新刊は、レジ回りのテーブルに少し並ぶだけであつた。

その斜め向かいに、成文堂書店があつた。現在、建物だけが残っている。盛時には、鳥取大学前に支店も出していたが、筆者が書店巡りをするようになった頃は、その面影はなかった。

駅方向に進み、若桜橋の袂に定有堂書店。昭和五十五年の開業だから、筆者の中では「新しい」書店である。今や、先の横山書店とここだけが、鳥取駅以北で健在の書店になってしまった。当初は、今の半分くらいの広さで、レジは入口横に、人ひとり入るのがやっとくらいなの、驚く程

小さなスペースだった。

橋を渡って、一本目の横道を日進小学校方向に進むと、坂本書店。コミックと雑誌が目立つ店だった。

本通りには富士書店（後、今井書店）本店があった。六階建てのペンシルビルで、一階が雑誌と一般書。二階が児童書と文庫・新書と人文系、政府刊行物、中三階は自然科学、建築土木、美術書、三階は辞書と学参、中四階は児童文庫の活動場所であったと記憶する。

同フロアは後にイベント場や古書コーナーになり、終い頃には二階以上を閉鎖して売り場を大幅に縮小、そして閉店。ビルは取り壊され、更地になって久しい。

さらに駅方向に進むと、ハム口書店があった。駅前大火以前の店舗は、露店のような佇まいで、平台に雑誌が所狭しと並べられ、天井からは、神宮曆なんぞがぶら下がっていった。火事後はビルに入ったが、やはり平台だけの店舗だったと記憶する。（横目で通り過ぎるだけだったのであやぶやである）

駅前まで出ると、太平洋線を挟んで大丸の向かいにあった

間口一間ほどの小さな店が丸吉書店。火事後は、ファツションビルの一階にテナント入居。後に、古巣の太平洋線に新店舗を出したが、店主が高齢になり閉店。

丸由百貨店となった大丸にも、かつては書籍売り場があったが、フロア改装の度に縮小され、最後は某書店のテナントとなったが、売り場も隅にやられ、文具売り場を兼ねるような形になり、とうとう無くなってしまった。

駅前のバスターミナルには、某々書店が出店していたが、余り商売にならなかったのか、早々に撤退した。

鳥取駅の駅ビル商店街の二階に、某書店（くどい）や某レコード店のテナントがあり、結構な広さだったので、よく覗いたものだが、これも改装の度に縮小され、現在、二階フロアに店舗はない。

今は昔、昭和も五十年代の話と思召せ。（閉店時期は概ね平成年間のことである）

## 鳥取あれこれ その七十八

内田 克彦（地域研究家）

尾崎放哉の妻・馨の母親である坂根としては、私立鳥取女学校の存続再出発のために帰鳥する前は、東京にいた。小山貴子『暮れ果つるまで 尾崎放哉と二人の女性』には、「馨のプロフィール」として次の記述がある。

父親坂根利貞が教員として赴任先の朝鮮で早逝し、母親と手の一つで東京に成育。四女一男の次女、明治二十五年八月二十五日生まれ。淑徳女学校に学んでいたが、明治四十二年に中途退学して、鳥取女学校を開校する母とともに鳥取に行っていた、

ところが、放哉の従妹の芳衛が一九〇三（明治三六）年四月、日本女子大学校国文学部に入學したとき、小石川表町の坂根方に寄宿している。芳衛と馨は、馨が放哉と結婚する前には、既に顔見知りであったのである。『放哉全集 第二巻 書簡集』に、明治三八年二月七日付の芳衛あての絵葉文が載り、解題に「あて先は、小石川区表町五九 坂根方 で沢芳衛の下宿先」とあった。『郷土出身文学者シ

リーズ①尾崎放哉』には、次の記述がある。

坂根とし（東京小石川区で因州池田藩の屋敷の管理を委託され、澤芳衛などの 女子学生世話をしていた〔略〕

この「表町五九」とあるのを見て驚いた。実は、碧川（旧姓 堀）かたの事績を調べているとき、主に本郷教会の會員から成る新社社によって刊行された月刊誌『新人』二巻七号（一九〇二年二月）「彙報」記事に載る、次の記述を見つけていたからである。

○同志看病婦会 東京婦人会（本郷教会の婦人会のこと）にては昨冬十一月下旬該会の事業として同志看病会なるものを小石川表町五十九番地に設け本郷教会員堀かた子姉が専ら任じ居らるると云う。吾人は此種の働が我基督教社会特に貴婦人社会に益々盛ならんことを切に望むものなり

因みに、この記事の最後には「創立委員」として、堀かたのほか、海老名みや子、河本かめ子、元良よね子、高田てる子、野口ゆか子、安井てつ子、松井とも子、本多こう子、伊藤きみえ子、丹羽けい子、中野ちい子、小瀧み

ね子、と著名な教育者等も載っている。

全く同じ地番としても、伝通院前の大区画の土地であるため、知り合う機会はなかったかもしれないが、荻原井泉水は「奥さんというのはクリスチャンで相当にやかまし屋だったのです。」と述べており、小山著では「道徳的に潔癖なという程度の意味」と書くが、ひよつとして、坂根馨は本郷教会と関係があったのかもしれない。

一八八五(明治一八)年に、旧藩主池田家と篤志家によって、神田区仲猿楽町二三番地に、久松閣貸費生徒の通学の便を図るために新設された「久松閣附属館」が、一八九一(明治二四)年に、東京市小石川区表町一〇九番地(伝通院裏)に移転している。そして、一八九〇(明治三四)年に鳥取県勸学会が設立され、鳥取県出身学生の寄宿舎となったことにより、「久松学舎」と改称している。

「久松閣附属館幹事」に就いていた人物名が『因伯郷友会雑誌』に載っている。『第壹號』(明治二四年三月一四日発行)では「永見明久」であり、『第貳號』(明治二四年一二月二四日発行)では、小石川に移っており、「村上謙」である。その後については、碧川かたの養父の堀正が書いた『堀正略歴』に次の記述がある。

〔明治二八年〕九月米子ニ帰り耕作ニ従ハントス。是ヨリ前キ、二十七年拾一月東京ニ於テ、池田家ノ設立ニカ、ル久松閣附属館幹事ヲ囑託セラレシ事アリ。故ヲ以テ再ビ其任ニ就カン事ヲ徒憑(とひよう)セラル。正菲才浅学元ヨリ其任ニ非ズ、然レドモ是亦国家ニ報ズルノ一端ナルヲ思ヒ、遂ヒニ帰農ノ志ヲ翻シテ、敢テ其命ヲ受ケ以テ現今ニ至ル。

そして、堀正の『除籍簿』を見ると、次の記述があった。現職のまま亡くなったのだろうか。

大正四年九月五日午前九時東京府東京市小石川区表町百九番地ニ於テ死亡同居者堀千代子届出

不思議なことに、『新人』の事務所所在地が、最初の「表町一〇九番地」から、一時的に「同志看病婦会」と同じ「表町五九番地」に移っていたり、「同志看病婦会」の住所が一九〇三(明治三六)年の一時期「表町一〇九番地」に在ったりしている。さらに、野口富士男著によると、一九〇二(明治三五)年四月末から一九〇四(明治三七)年八月頃まで、徳田秋聲が「表町一〇九番地」に住んでいたとされている。全くよく分からない。

# 八代日記

(三十五)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

十二月三十一日、一月一日

年末年始は休みなし。大晦日も通常出勤で、朝から会社で初売りの準備に取り掛かる。夕方から妙見宮に向かい設営作業。寒いけれど晴天で清々しい。設営後にストープの上で温めたおでんを食べたりコーヒーを飲んだりして初詣のお客さまを待つ。

昨年、一昨年よりも人出が戻ってきたようだ。そしてお参りする人々の笑顔を見てるとなんだか元気が出てきた。順調に販売できたが、売り場が私と、前期高齢者一人と後期高齢者一人の三人組(仲良し)なので、徹夜(車で交代で仮眠)のち元日の夕方まで販売するのは体力的にも法的にも今年が限界なのではないかと思う。特に自分が前年よりも眠さがしんどかった。高齢者の方がむしろ元氣。求むアルバイト。が、毎年そう思っているのもう少しいけるかもしれない。

一月某日

朝の便で東京へ。東高円寺UFO CLUBにてライブ。会場の二十七周年の記念月間イベントにお誘いいただき。二十七年はすごいなー。

いつもよりお客さんが多い気がして何やら視線を感じて(自意識過剰)緊張してしまったが音環境もよく、楽しく演奏できた。新曲も二曲演奏した。

トリのシムムラテツヤ&SUPER LUCKY BR OTHERSがとても素晴らしかった。ロックなのにかわいさがあつて、完成度の高いポップスとしても響く。みんなのうたに毎月流してほしいような曲ばかり。バンドの演奏も完璧です。負けました。二月のライブ3本立ては彼らの完成度を目標としたい。

翌朝七時過ぎの便で熊本に戻り仕事へ。体が疲れるのは心地よいが、気持ちの切り替えが日に日に難しくなっている。ライブの時の気持ちで仕事もしなきゃと思うがなかなかそれができない。

一月某日

二月のライブ3本立てがとか言っているが、仕事が精神的にたいへんになってきており、一日でも熊本を離れるのは気が気ではなく、そんな気持ちだとライブも仕事も上

手くいかないメンタルしか持ち合わせていないので、メンタルが安定している、メンタルが健康である、メンタルが平静である、目の前のことに集中できる、そつなく両立できる、そんな人々に羨望があるが、そんなメンタルに自分になってしまったらそれは多分僕じゃない。それは僕じゃないよ。誰になってしまうのか。それが成長なのか。それが成長だとしたら成長を恐れているのか僕は。いつまでも子どものままなのだろうか。大人になりたい。

一月某日

『笑犬楼』S.偽伯爵』（筒井康隆・蓮實重彦、新潮社、2022年）を読む。面白い。

職場でも、試食して「おいしいです」と言うと「おいしいと言いな」（もつとニュアンスを説明しろ・良くないところを見つけろ）と怒られるが、面白いとかおいしいとかしか言えない。

面白かったのだが、ひとつの時代が去り行く寂しさもあり、こういう会話をどなたか引き継いでくださる方はいらっしやるのだろうか。

一月某日

寒波がきた。熊本も氷点下3度まで下がったが平野部は

さほど雪は降らなかった。さほど降らなかったが翌朝は高速道路が使えず、下道で出社したのだが通行止めになっているルートがいくつかあったよう、大渋滞。会社まで4時間かかってしまった。こういう極端な天気の時市や県や自治体主導で休日にしてはくれまいか。

一月某日

子どもがTOKYO NO. 1 SOULSETの「黄昏95」という曲を好きになってしまい、難しいラップの部分の歌詞も1番だけ音でなんとなく覚えてしまっており感嘆している。「僕はそもそも昼に生きるのか そうでなければなぜ昼は 太陽の光で注意を引き たちまち僕らの目を眩ませて 輝きたいと思わせるのか」とか。

B I K K Eの歌詞はとてもすばらしい。詞集が2冊出ている気がするが『あきらめるほどの行方』ともう1冊は何だったか。書店員だった頃に何かの雑誌で紹介した記憶があるがその雑誌名も忘れてしまった。もう完全に現場の記憶がないな。雑誌の目録とかまたじっくり読みたい。あれももうなかったりするのかな。

## 四姉弟

秦阜 梅林

(楽人)

の懐に這入り込むやうな格調高ひ其れ…正に静劇。

二

チエーホフの静劇は例へ多くの隱喩に満ちてゐるにせよ「フィクション」だと思つて来た…  
しかし描かれて居る人物や営み、人間模様の、何と生き生きしてリアルなこと！

一

「三人姉妹」は、以前シビウの劇団が鹿野に客演、舞台中央に暗ひ色で木製の長ひ廊下の如きセットが印象的。しんみり、しっとりした語らひが絶妙な美しひ舞台で当地での観劇歴（とは云へ舞台裏でバガニーニを弾いたけれど）の中でも格別なものであった、たった一言も解さなひルーマニア語上演であつたにも関はらず。本場欧州の演劇文化

現在、鳥の劇場では真つきらな舞台を創つてゐる。此処にはタイトルロールであるオーリヤ、マーシヤ、イリーナ三姉妹に加へ一家長男のアンドリユーシヤ四人の兄妹に嫁ナターシヤ、男爵トウゼンバフ…と言つた貴族の子弟や富裕層、モスクワから赴任して来たヴェルシーニン中佐等、其れに絡む老軍医…に召使いや下僕、所謂下々迄様々な地位、経歴、そして過去をもつた老若男女が生き生きと描かれて居る…其々の弱さ、醜さ、人間らしひ焦燥や現実も赤裸々に。

三

色々夢を語り乍ら然し誰も其処に向かつて行かうとはしなひ、唯流されゆく儘、徒然に暮らしてゐる、さうまるで私達のやうに。「モスクワへ、モスクワへ！」と唱へ乍らまるで空虚な念仏のやう…形式許り重んじ賢者を自認する愚鈍な教師は「人形の家」の主人公の夫宜しく妻を「愛してゐる」と公言しつつまるで理解せず、関心さへ持たず

縛り付け、世間体計り気にして、コキユを演じる羽目に陥る夫。学問に身をたていずれば名を上げるだらうと家中から期待され乍ら家族の誰にも理解されなひ虚しひ独白を語りつつ俗物の下で市議に名を連ねるのがやつの長男。賭博に嵌り身を持ち崩している。毎日の勤めに唯忙殺され家庭を顧みる余裕も無く嫁の横暴に戸惑ふ校長代理の長女：自暴自棄に陥り深酒の中虚しひモノローグを繰り広げる老医師：時代が違ひ、土地こそ違つても、私やら、周りにかう云ふ人は「あままるで今日の自分みたい」だと思ひやしなひだらうか？！

チエーホフ曰く「いづれ時代が変わり、軽気球に乗つて空を翔けるやうになつても、背広の型がかわつても（並べられる、両者！）人間はかわらなひ…だらう」いやはや仰言る通りではある…

ps三年振りに端役を演じて居る…市井の隅からブルジョワの悲鳴を他人言のやうに聞ひて居る、權威に阿り慣習の泥沼の底蠢き乍ら…

20230130

上演案内 鳥の劇場公演  
チエーホフ作「三人姉妹」

於 鳥の劇場、2/10～3/05

TEL0857 84 3268 問 鳥の劇場

今回の一冊A・チエーホフ「三人姉妹」神西清訳（新潮文庫・刊）

今回の一枚P・I・チャイコフスキー「イエフゲニー・オネーギン」（プーシキン原作による歌劇三幕、台本K・シーロフスキー、E・チャイコフスキー）E・ビエロフG・ビジネフスカヤ、I・ペトロフ、S・レメシエフV・ペトロローヴァ他、ハイキン指揮ポリシヨイ劇場合唱団、管弦楽団、モスクワ 1955



（イラスト・秦阜梅林）

## 多分、元氣になります

三浦 永理

(二十八歳・女性・教員)

一月の誕生日前日。人生で初めて大腸カメラをした。小さい部屋に四、五人に閉じ込められ、下剤を飲んでいく。そして、順番に午後の内視鏡検査に向かった。

潰瘍性大腸炎だと言われたのは、この日である。

年末からずっと体調は良くなかった。胃腸炎かと思っていたが、胃の方はすこぶる元気だった。問題は、大腸である。町医者に行つて薬を飲んで良くはならず、「潰瘍性大腸炎の可能性があるので大きな病院に行つてください」と言われた。

潰瘍性大腸炎は、著名人もその罹患を公表している人も多くあり、よく知られる難病の一つである。

「大腸の粘膜に潰瘍やびらんができる難病。直腸から結腸にかけて連続的に病変が広がり、下痢や腹痛が頻繁に起こる。炎症性腸疾患の一。厚生労働省の特定疾患に指定さ

れている。原因として自己免疫反応の異常などが考えられているが詳細は不明。」(デジタル大辞泉)

つまり原因がわかっていない。ひとまずは、症状が出ている「活動期」から、症状が落ち着いている「寛解期」を目指すことになるが、それは「治った」ことを意味しないだろう。頻繁に「寛解期」と「活動期」と繰り返す人もいれば、初回だけ発症し、その後症状が抑えられる人がいる。ただそれも正直死ぬまで、「活動期」が来る可能性はあるのだから、どのようなタイプかは実際わからない。症状の激しさもさまざままで、外科的な治療が求められるほど重症な人もいれば、私のように投薬治療から始める人もいる。

この二ヶ月ばかり考えているのは、私にとつて健康が当たり前だったということだ。痩せ型ではあったが、持病もなかったし、食物アレルギーもないので何を食べるかを気にする必要はあまりない人生だった。お酒は適度に飲む。海外でお腹を壊すことも少なかったから、気軽に旅行できた。

そして、そんな当たり前が突然さよならとなった。「治らない」ことが当たり前の病気がひよいと私の前に現れた。悲しい、悔しいという気持ちより、「私もそっち側になるのか」と呆気にとられている日々である。

一生ついて回るなら、隠す必要もないだろうと思ひ、病氣のことを伝えることに決めたのは、告知からすぐのことだった。

病氣になると、必要としてこなかった本が身近にくる。潰瘍性大腸炎向けのレシピ本や、「これで完治!」などという本も目に入ってくる。

そんな中で、検査についてきた母親と私の目に入った本——二人ともどこかでその本を見て、「潰瘍性大腸炎」というキーワードと繋がって覚えていた——が、『食べることと出すこと』（頭木弘樹）だった。

著者の発症は、二十歳の時で、なかなか病院に血便が出ていることを言えず、悪化して入院した話から始まる。そういう意味でも、病院に行く意義もわかっている大人になったタイミングで発症したのは、不幸中の幸いだったかもしれない。いずれにせよ、私は軽症で、著者はかなり重い症状で始まったことは大きく異なっている。

それでも、病氣になったことで世界が変わってしまったこと、同じ病氣でも状況が違うことなど、繊細に患者の視点から語られるこの一冊は、私にとつても発見が多くあった。分かって欲しいけれど、分かってもらうことではない。そんな絶望と共に病氣との日常が語られる。

そんなこんなで、自分の性格のことも考えて、一旦症状が落ち着くまで東京の実家に帰って、休みを取ることにした。

「きちんと治ってきてね」と言われると、この病氣の場合、首肯しがたい。なぜなら、治ることは今の医療では今のところないから。

それでも、「早く元氣になって戻ってきてね」は、私にとっては「焚き火」のようにありがたい言葉だった。縁もゆかりもない鳥取の地で、私の存在を認めてくれる人はいるし、その人に会うために、また交わるために、一旦休むのだとも思う。

ちなみに、本書の中で、頭木氏はこの病氣を「焚き火」のようだとも言っている。落ち着いたかと思ったら、落ちてははいない。消えたと思ったら、火が大きく上がることもある。

それでも、多分、元氣になります。そして、こちらに戻ってくるつもりです。

## ストック

あきの素生

(くうねるめがね)



年末年始に雪が無いなんて信じられない、気温も高いし、一番長い長靴をずっと玄関に置いていたけれど、今シーズンは使わないかもしれないから片付けようかな、なぞと思っていたら、十年に一度の最強寒波とやらがやってきて閉口した。エアコンから一番遠いキッチンの気温計は四度。調理を始めて、ガスコンロの火で少しは温まったかと思っただら五度と、家の中でもアウターが手放せない。こたつで調理できたらどんなによいかとぼやきつつ、厚い上着でもこもこしながら台所に立つ。動いていれば凍えることもなく、洗い物をするときのお湯で暖を取ることができるので、何とかなっている。本当にこたつに入ったら、何もかもどうでもよくなり、きつと立ち上がれない。人間らしい生活のため、何より自分の空腹を満たすために、寒さに耐えてごはんを作る。

自分の持っている服の中で、「最暖」と位置付けているセーターがある。買ったのは高校生の頃だ。おしやれや流行には疎かったのだが、流行に左右されない長年使えるものにあこがれて、太い毛糸でぎっくり編まれたノルディック柄の丸首セーターを選んだ。アイボリーの地に黒やグレイのシンプルな模様が編み込まれている。素材は「毛100%」でとても暖かく、大きくて重い。大切に思うあまり、また、その大ききのためにアウターを選ぶこともあって、結局大して袖を通さないまま、衣装ケースの主となっていた。それを引っ張り出して活用するようになったのは、ここ二、三年だ。流行に左右されないものが身に馴染むようになった。流行というものがまろやかになったようにも感じる。年齢によるものか実際にそうなのかはよくわからない。長年使えるというよりか、タイムカプセルから出して使用に耐える、みたいになってしまったが、セーターの暖かさは折り紙付きで、今回のようにとびきり寒いときには本当に頼りになる。

ちよつと気の利いた箱などが捨てられない。いつか使うんじゃないか、その「いつか」が来たとき、これを捨てていたら後悔するんじゃないかという考えが拭いきれない。今年に入ってまだひと月経たないが、そんな小箱がすで

に二箱ある。改めて書くと、なんてことだ、と愕然とする。来るか来ないかわからない、「いつか」のために、スペースを貸している。しかもそれが来たところで、ちようどいい小箱があるだけだ。自分の使う雑多なものを入れるくらの用途しかない。もし捨てていたとしても、捨てた箱のことをたぶん思い出さない。なんてことだ。件のセーターのような「成功体験」が、この癖を助長してきたともいえる。

おいしいものは最後に取っておきたい。いい思いをするのを先送りにして、喜びを増幅させたい。減るともつたない。失くしたくない。得したい。心の内をのぞくと、そんなモチベーションが見え隠れしているが、大切にしまっておいたものが、使われなまま朽ちてしまうことがあることに遅まきながら気付き始めた。以前考えていた「先」って今じゃない?とか。いつの間にか「いつか」がやってきているのだ。

思えば、いろんなものをしまいい込みしまいい込みして過ごしてきた。セーター、ジャケット、ストール、バッグ、バスタオル、詰替用洗剤、色鉛筆、ツナ缶、鍋等々。感情みたいなものも、取っっておいたりした。今よりもっと先の時間が長かったのだから、備えなくなるのは当たり前だが、

あのとき使ってしまった大切なものを惜しげもなく使えるときがたくさんある。

溜め込んできた大切なものを惜しげもなく使えるときがやってきたのは、とてもうれしい。溜め込み体質の人間がフロアに舵を切るには勇気がいる。小箱を捨てることさえも。でも、きつとそのうち、身の回りのものが過不足なく巡り、今より身軽になれるのではないかと楽しみにしている。



## 野苺事件 ミス・マープルからの贈り物 (一)



ドラマメリア (座敷わらし)

その人のことは密かに「ミス・マープル」と呼んでいた。

高校時代海外ミステリに傾倒していたわたしが、当時の世界史の先生に献上したあだ名だ。朗らかで話し好きで、それでいて時折笑顔のまま鋭いひと言を閃かせるさまが、クリステイーが生み出した探偵に似ていたからだ。世界史も教わったし、高校三年間を通じての担任の先生でもあった。母校のある故郷の町から足が遠のいたこともあり、卒業後は年賀状を交わすだけになっていたが、Y高のミス・マープルはご退職後も活動的で、世界中の史跡を訪ねて飛び回っておられる様子が楽しい絵はがきから窺えた。

自宅に小包が届いたのは先だつてのことだった。差出人はミス・マープル。怪訝に思いながら開封してみると、中身は英国王室御用達ブランドのティーセットだ。繊細なワイルドストロベリーが描かれたそれは、かつての「教え子その一」に贈るには少々豪華すぎるし、何より理由も前触れもなさすぎた。添えられた一筆箋にはわずか一行、「ド

ラメリアさんに贈り物をしようと思いいち立ちましたとある。いったいどういうことだろう。何かあったのだろうか。卒業以来二十数年はがき一枚のやりとりしかない遠方の元教え子に、突然プレゼントをするような何か。重大な、あるいは深刻な何か。

便箋を透かしてみてもあぶつてみても隠された文字は浮かび上がらず、手元に解説の鍵となる『自省録』もない。不安に駆られて記された電話番号にかけてみても、呼び出し音が鳴るばかり。……なんだ。何が起こっているのか。

(つづく)



・編集後記:

雪のない年末年始に、姪っ子はずいぶんがっかりしていました。と思つたら、今度の雪。送られてきた写真には、薄い雪を集めて作られた努力の結晶であるウサギの姿が。

ドラマメリア(編集長)

寄贈いただきました。芥川喜好『時の余白に 続々』みすず書房。美術記者。読売新聞での二十四年の連載の最終巻。内外の評価に支えられてのお仕事ですね。同窓。

奈良敏行(発行人)